

学位論文要旨

大村はま話しことば学習指導実践体系の考察

－国語教科書及び指導資料等に見られる

話しことば教育観を手がかりとして－

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 教科教育学分野
国語文化教育学領域

D181175 伊 木 洋

1. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

大村はまは、話しことば学習指導の重要性を深く認識し、話しことばを基底にすえて、大村単元学習と呼ばれる独創的で先駆的な国語教室を創造した。大村はま話しことば学習指導に関しては、大村はま話しことば学習指導の実践体系に学ぶことの価値や大村によって中学校国語科教育における話し合い・討議の学習指導の原理と方法が開発されたことについての言及がなされてきた。大村による実践の記録は『大村はま国語教室』に結実しており、実践の場では大村はま国語教室における学習指導を礎として多くの学習指導が展開されてきた。本研究は、実践の場に多大な影響を及ぼしてきた大村はま話しことば学習指導を取り上げ、その実践体系を明らかにしようとするものである。

大村はま話しことば学習指導の実践体系を解明していくためには、大村はま話しことば学習指導はどういうものであるのかということをはっきりさせる必要がある。大村はま話しことば学習指導実践史研究においては、昭和 20 年代における実践について考察がなされている。大村教室で学んだ昭和 47(1972)年度入学生が記した 3 年間の学習記録に基づいた研究も行われ、教科書の枠組みを超えた総合的な単元学習が実践されていった時期については解明されつつある。しかし、教科書の枠組みを超えた総合的な単元学習が実践される以前の昭和 20 年代から昭和 40 年代の大村はま話しことば学習指導については、資料の入手が困難なこともあり検討の余地があると考えられる。また、各年代における大村の話しことば学習指導は密接につながり合って形成されていったと考えられる。さらに、こうした実践を通して生み出されていった大村はま話しことば学習指導が実践の場に残したものは何かということに目を向けておく必要があると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究では以下の三点の研究課題を設定した。

- ① 昭和 20 年代、昭和 30 年代、昭和 40 年代の大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるのかということをはっきりさせる。
- ② 各年代の大村はま話しことば学習指導はどのようにして創りあげられたのかということをはっきりさせる。
- ③ 大村はま話しことば学習指導が実践の場に何を残したのかということをはっきりさせる。

(2) 研究の方法

本研究では、大村はま話しことば学習指導に関する各年代の資料として、『大村はま国語教室』とともに、大村が編集に関わった国語教科書の話しことば学習資料、教師用指導書、指導資料、研究会資料、大村教室で学んだ学習者の学習記録を収集し、これらの資料にみられる大村の話しことば教育観を手がかりとして分析・考察を進めるとする方法をとる。

具体的には、大村が編集に関わった教科書の中から、昭和 20 年代の教育図書発行『國語中学校』(1948)、教育図書発行『中学総合国語』(1951)、昭和 30 年代の筑摩書房発行『国語』(1956)、昭和 40 年代の教育出版発行『新版標準中学国語』(1972)を取り上げる。教科書及び指導資料等の中から、大村が作成、執筆したと考えられる資料を取り上げて分析・考察する。また、大村教室の学習者が記述した学習記録を取り上げる。学習記録からは、学習者の側からみた大村はま話しことば学習指導をとらえていくことができると考える。

2. 各章の概要

第1章 大村はま話しことば学習指導研究の成果と課題

第1章では、大村はま話しことば学習指導研究の成果と課題を検討した。これまでの大村はま話しことば学習指導に関する研究を通してその内実が明らかにされつつあるものの、大村が編集に関わった国語教科書及び指導資料等を取り上げて検討するという点においては十分であるとは言い難く、昭和20年代から昭和40年代については資料の入手が困難であることもあり検討の余地がある。そこで、本研究では大村が編集や作成に関わった昭和20年代、昭和30年代、昭和40年代の国語教科書及び指導資料等を取り上げ、そこに見られる大村の話しことば教育観を手がかりとして、大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるのか（第一の研究課題）、大村はま話しことば学習指導はどのように創りあげられていったのか（第二の研究課題）、大村はま話しことば学習指導が実践の場に何を残したのか（第三の研究課題）ということ进行分析・考察し、大村はま話しことば学習指導実践体系を解明していくこととした。

第2章 昭和20年代の大村はま話しことば学習指導

第2章では、昭和20年代の大村はま話しことば学習指導の特徴を明らかにするため、教育図書『国語中学校』の無署名教材、教育図書『中学総合国語』及び指導資料、学習記録を取り上げ、分析・考察を行った。

昭和20年代の大村はま話しことば学習指導では、戦後初期の『国語中学校』の無署名教材に見られるように、大村が限定的ではあったものの書くことの学習指導と関連させ、書くことの学習指導の教材の中に範例となる話し合いの場面を組み込むという方法を示していることを明らかにした。学習記録「国語の技術 単元3話について」の考察からは、書くことの学習指導と関連させながら、実際に言語経験をさせることを通して話しことば学習指導が展開されていることを述べた。『中学総合国語』では言語経験を通して話しことばの力を身につけさせるという方向性を重視しつつ、大村が記した解説資料「単元と言語経験の表について」の考察から、言語経験がかたよったりぬけおちたりすることのないよう「単元と言語経験の表」が作成され、1年間の学習指導全体を見通してバランスよく言語経験をさせることに目を向けていったと考えられることを指摘した。

第3章 昭和30年代の大村はま話しことば学習指導

第3章では、昭和30年代の大村はま話しことば学習指導の特徴を明らかにするため、大村が執筆した昭和31年度版『国語』に基づく単元「対話と問答」、単元「会話と討議」、単元「独話と討論」の学習指導の学習指導の案と、その学習指導の案に基づく学習指導の実際について学習者の記した学習記録をもとに考察を行った。

昭和30年代における大村の話しことば学習指導は、西尾実が監修した教科書『国語』の編集及び『国語 学習指導の研究』の学習指導の案の執筆に携わったことに大きな影響を受けており、大村は西尾の話しことばの形態にしたがって系統性を考慮しつつ具体的な学習指導の案を構想し、実践していったと考えられる。学習指導の案の学習指導目標では、言語生活における「対話と問答」「会話と討議」「独話と討論」の重要性を理解することを土台とし、その方法と問題点の解決を目指して日常の話しことばの生活において話しことばの学習の場を見いだしていく主体的な態度の育成が目指されている。また、聞くこと、話すことの技能目標が示さ

れ、それぞれの目標が学習指導の案においてどのような活動の場面で評価できるのかということが各時間の学習指導の案において具体的に示されている。学習記録の考察から、実際に学習者に自らの話しことばの問題点を見つめさせることから学習指導が始められ、教科書の学習資料を生かして問題点の解決に向けて考えを深めさせながら、評価表を用いて自己の問題として話しことばの問題点と向き合っていくことができるよう学習にくふうがこらされていることを指摘した。

第4章 昭和40年代の大村はま話しことば学習指導

第4章では、大村が編集に関わった教育出版発行『新版標準中学国語』及び指導資料「聞くこと話すことの指導はこのように―『新版標準中学国語』の教材研究―」を中心に昭和40年代の大村はま話しことば学習指導について考察を行った。

昭和40年代の学習指導では、国語教室において話しことば学習指導が形骸化しているという実情をふまえ、聞くことや話し合い・討議の重要性とむずかしさが深く認識され、読むことや書くことの学習指導との関連が図られている。国語科の学習内容を話題として学習者が本気になって考え、話し合い、発表し合う中で、評価表や録音機器を活用して自己の話しことばをふりかえり、話しことばの自覚を促していくという話しことば学習指導の一つのあり方が示されていることを指摘した。

第5章 大村はま話しことば学習指導の実践体系の考察

第5章では、第2章から第4章の検討をもとに、大村はま話しことば学習指導の実践体系の解明を試みた。

第1節では、昭和20年代から昭和40年代の大村はま話しことば学習指導はどのようなものであるのかという第一の研究課題について考察した。

昭和20年代、戦後初期の大村はま話しことば学習指導では、『国語中学校』に見られるように書くことの学習指導の教材の中に範例となる話し合いの場面を組み込むという方法が示されたが、無署名教材の一場面という限定的で恣意的なものであったと言える。『中学総合国語』においては価値ある話しことばの言語経験が年間を通して単元に位置づけられ、計画的で意図的な話しことば学習指導が組織されることとなっていた。

昭和20年代の豊かな言語経験をさせることそのものを重視した大村はま話しことば学習指導は、昭和30年代には『国語』の考察から明らかになったように、言語活動を通して実践的な話しことばの力を育てる方向性を保ちつつ、どのような態度や技能を育てるのかという分析的、系統的な面を意識した話しことば学習指導の方向に進んでいった。

昭和40年代の『新版標準中学国語』及び大村が執筆した指導資料「聞くこと・話すことの指導はこのように―『新版標準中学国語』の教材研究―」の考察によって、昭和30年代の分析的、系統的な面を意識した話しことば学習指導から、昭和40年代には、学習者が国語科の学習内容について本気になって考え、話し合い、発表し合う中で自己の話しことばをふりかえり、生きた話しことばの力を体得していくという、国語科の話しことば学習指導として一つの典型的で現実的な形へと進んでいったことが明らかになった。

以上の大村はま話しことば学習指導の形成過程を次のように整理した。

	年代	教科書	話しことば学習指導の特徴	
導入期	昭和 20 年代 戦後初期	『国語中学校』 (1947)教育図書	書くことの学習指導の教材の中に話し合いの場面を組み込むという形で、話し合いの指導を行う方法を提示した。	限定的 恣意的
拡大期	昭和 20 年代	『中学総合国語』 (1951)教育図書	豊かな話しことばの言語経験をさせることを重視し、年間を見通して単元に位置づけた。	計画的 意図的
深化期	昭和 30 年代	『国語』 (1956)筑摩書房	言語活動を通して話しことばに対するどのような態度や技能を育てるのかという能力を検討した単元を組織した。	分析的 系統的
集約期	昭和 40 年代	『新版標準中学国語』 (1972)教育出版	読むこと、書くことの学習指導と関連させ、学習者が国語科の学習内容を話題として本気になって考え、話し合い、発表し合う中で、話し合いのしかたや研究発表のしかたなど話しことばの力を体得できるよう単元を構想した。	典型的 現実的

第 2 節では大村はま話しことば学習指導がどのようにして創りあげられたのかという第二の研究課題について考察した。

昭和 20 年代、戦後初期の大村はま話しことば学習指導は、『昭和 22 年度（試案）学習指導要領国語科編』に示された「単元を中心とする言語活動の組織」を重視するという方向にそって行われている。大村はま話しことば学習指導においては、実際に言語活動を行う学習の場は「実の場」と呼ばれて重視されている。本研究では、大村教室における「実の場」を「学習者にとってその活動を行う必然性や意味のある学習の場」と定義し、「実の場」を通して話しことば学習指導を行うことによって、国語教室における話しことば学習指導と実際の言語生活を結び、単なる知識としてではなく、実践的な話しことばの力を体得することが目指されたと考える。さらに、『昭和 26 年(1951)改訂版中学校高等学校学習指導要領国語科編（試案）』の編修委員の一人であった大村は、話しことば学習指導に対する自らの考え方を、価値ある言語経験を豊かに与えていくという学習指導要領の方向におし進め、戦後初期の『国語中学校』の限定的な話しことば学習指導から、『中学総合国語』の「単元と言語経験の表」に見られる 1 年間の国語科学習指導全体を見通して意図的、計画的に言語経験をさせていく学習指導へと話しことば学習指導を進展させていったと考えられる。

昭和 30 年代における大村の話しことば学習指導に対する考え方は、経験主義の学習指導に対する批判に込めようとする西尾の考え方をふまえ、言語活動を通して実践的な話しことばの力

を育てる方向性を保ちつつ、系統性や能力の分析を十分に意識する方向へと進んでいったと考えられる。

昭和 40 年代には、全国の国語教室において話しことば学習指導が形骸化しているという実情があった。大村はこの問題を乗り越えていくために、自己の実践をふまえて国語科における話しことば学習指導のあり方を整理し集約していったと考える。大村はこうした話しことば学習指導に対する考え方のもと、『新版標準中学国語』において国語科の学習内容を話題とした話し合いの場面などを教材化するとともに、指導資料としてポイントをまとめ、全国の指導者に向けて話しことば学習指導の一つのあり方を示していったと考える。

第 3 節では、大村はま話しことば学習指導が実践の場に何を残したのかという、第三の研究課題を考察した。

戦前の話しことば学習指導では発表を中心とする指導が行われ、しつけとして態度が重視される面があったが、戦後の話しことば学習指導においては、民主社会の形成に向けて話し合いの学習指導が重視されていった。こうした状況の中で、大村は戦後新制中学校において民主社会を形成する担い手として不可欠な対話や話し合いをすることができる実践的な話しことばの力を育成することを目指していった。大村は戦前には見られなかった、学習者を必要感のある話しことばの学習の場（実の場）に立たせ、言語生活における話しことばの使用場面を教材として話し合いの指導を中心にすえた話しことば学習指導を実践し、中学校国語科における話しことば学習指導の一つのあり方を具体的に示していった。

さらに、実践の場における話しことば学習指導の重要性と困難さを深く認識していた大村は、教科書や指導資料等の作成にあたって、自己の実践に基づいて学習指導の実際をエピソードのように記述していくことによって、話しことば学習指導の具体的なイメージを描き出し、実践の場に示そうとしたと考える。大村はまという一人の優れた実践者が何を願い、実際にどのような話しことば学習指導を行ったのかというエピソードによる記述は、実践の場で話しことば学習指導に取り組む指導者にとって、実践の具体的な姿やイメージを思い浮かべ、貴重な示唆を得るものとなったと考える。

第 4 節では、大村が編集や作成に関わった昭和 20 年代から昭和 40 年代までの国語教科書及び指導資料等の考察から導き出される大村はま話しことば学習指導の実践体系について、目的・目標、内容、方法という観点から考察した。本論文に言う「実践体系」とは、教育実践にそなわった構造（仕組み）のことである。大村はま話しことば学習指導の教育実践には次のような構造（仕組み）がそなわっていると考える。

大村はま話しことば学習指導には「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手を育てる」という一貫した目的・目標があった。「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」を育てるためには、「担い手」となるための話しことばをどのようにすれば身につけることができるのかということ、学習者が具体的にイメージしていかなければならない。「担い手」となるための話しことばを学習者にイメージさせていく方策として、大村はま話しことば学習指導では、戦後の各時期に次のようなことに焦点があてられていた。

導入期：書くことの学習指導の教材の中に話し合いの場面を組み込む

拡大期：話しことばを使う経験をさせる単元を開拓する

深化期：話しことばを使う態度・技能を系統的に身につける

集約期：書きことばの学習と関連させながら本気になって話しことばを使う場と機会を設ける

それぞれの焦点に即して、学習者が「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」としてどのようにふるまえばいいのかという具体的なイメージをもって実際の話しことば学習に取り組んでいくための教材にくふうが凝らされた。その多くは「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」として話しことばを使う場面を指導者である大村自身がエピソードを記す形で創作し、それをモデルとして学習者は学習に取り組んでいった。

そのようなモデルとしての話しことばの使用場面を教材とした学習指導を行った場合、モデルをもとに自分たちが必要な場面で使うことができるかどうか重要な問題となる。学習指導の中で学習者自身が自らの話しことばの使用をふりかえり、より適切な使い方を自ら選び判断していかなければ、用意された具体的な使用場面を描いた教材は、反復し記憶する対象で終わってしまうことになる。そこで、モデルとしての話しことばの使用場面を使いながら自分たちが行った話しことば実践をふりかえり、より効果的で生きたやりとりをするにはどうすればいいかということ、絶えず学習者同士や指導者と吟味し検討する機会が設けられた。ここに、大村はま話しことば学習指導実践の重要な構造（仕組み）を指摘することができる。

このような、「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」を育てるという確固たる目的・目標に基づいて、「民主社会」を形づくる「担い手」の理想的な姿を中学生がイメージできるように記述された教材をもとに、学習者が理想的な姿と現実の自分たちの話しことば実践とのギャップを見つめながら効果的で生きた話しことばを選択することを積み重ね、「民主社会」を形成する話しことばの「担い手」として自立することを目指すという構造を、大村はま話しことば学習指導に見ることができることを論じた。

結章 研究の総括と展望

結章では、本研究を総括し展望を述べた。

本研究の成果として、国語教科書及び指導資料等を取り上げ、第5章で示したように、大村はま話しことば学習指導実践体系として、「社会的な存在として民主社会を形成していく担い手」を育てるという確固たる目的・目標に基づいて、「民主社会」を形づくる「担い手」の理想的な姿を中学生がイメージできるように記述された教材をもとに、学習者が理想的な姿と現実の自分たちの話しことば実践とのギャップを見つめながら効果的で生きた話しことばを選択することを積み重ね、「民主社会」を形成する話しことばの「担い手」として自立することを目指すという構造が見られることを明らかにしたことがあげられる。

今後の展望として、大村はま話しことば学習指導実践史研究において、貴重な考察の手がかりとなる国語教科書及び指導資料等や学習記録をもとにさらなる分析を行っていく必要があると考えている。とりわけ大村が実践提案を行った国語科実践研究発表会等の資料を取り上げて考察していく必要がある。昭和50年代以降の大村はま話しことば学習指導、さらには、昭和20年代以前の高等女学校における大村はま話しことば学習指導を対象として研究を進めていく必要があると考えている。